

# 卷頭言

ノンフィクション作家久田恵が産経新聞に連載中のコラム「ゆうゆうLife」二年分の原稿をまとめた「家族がいてもいなくても」の中に、「妻でも母でもない女として」と題する一文がある。シングルマザーであった作者は三十代後半で親の介護を始め、それが二十年以上にも及んだ。その母も父も逝き再び一人暮しになった時、ふと口をついて出るのは母の次の短歌だと言う。「悔やむまじたとえ冬野にわれひとり風が枯れ木の枝鳴らすとも」作者は母の覚悟のこの短歌に力付けられる。そして母の結婚したての二十代から六十代までの人生の、ステージごとに作者が母の短歌集から選んで編んだ作品集をなにかにつけて開き、励まされている。このコラムの中に前述の歌の外に「装わぬわが貌ありてさりげなくこの抽斗ちゆうとに鍵かけておく」「遠さかるもの今さらに追ふなかれわが行く道の春の逃げ水」の二首を置く。最後に「母の遺した短歌を手にとりたくなるたびに、そうかあ、親を理解したいという子の思いは、親を喪って初めて生じるものなのか、と思うことしきりである。」と結ぶ。

私達は歌を詠む。自らの命を詠む。それが愛する子や孫にどう伝わるかを考えたりはしない。しかし子や孫が自分の父や母や祖父や祖母の残した歌を通してその人生を理解し、励まされるとしたら、これ程の人生冥利はない。

阿部先生が、短歌で地位を得るよりも、一首でも良い歌を残す為に、その事だけを主眼として平等な太陽の舟短歌会を創設なさった。その先生の思いが形を変えて私に迫ってくる。私は改めて太陽の舟短歌会の一員であることを誇りに思った。

(高嶋)

## 太陽の舟 目次

三十一巻 七月号 (通巻一九五号)

わが愛する歌	— 名歌鑑賞 —	庄司 久恵	1
卷頭言		高嶋 邦彦	2
二十五首詠		梶川喜與志	2
阿部正路論 (第九十三回)		須藤 宏明	4
歌誌散見 (第六十九回)		豊泉 豪	5
作品Ⅰ		八代 陽子 他	6
五月批評 (作品Ⅰ)		佐伯 朋子	16
	(作品Ⅱ)	多久和玲子	17
合 評 (座談会)		岩橋千代子・武田 節子	18
選者十首		森本 元昭・上田やい子	20
秀歌拔芳 (二九三号)		高嶋 邦彦	21
作品Ⅱ		杉山 榮子 他	22
文法講座 (七)		奥田 清	26
作歌の目・作歌の技法 (第五十四回)		三木 勝	35
歌帖余白 (六十七)		松岡 三夫	36
歌会・支部報告 他		山田 (紀)・山名・松岡	38
編集後記		表紙	39
		イラスト 阿部正冬	

## 瑞泉郷

梶川喜與志

冬枯れの瑞泉郷は純白の雪化粧して朝陽に輝く

岡田師は病無き世を創らんと手立てを示す瑞泉の郷

療院の屋根は鶴翼の形なり夜明けの空に羽ばたかんとす

なだらかな形状をなす里山の森に佇む奥熱海療院

陽と水と土の恵みに野菜らはいのち育み健康くれる

大自然を師と仰ぎ見て穢れなき土を作りて野菜育てる

朝霧の放牧場にのんびりと草食む牛のソフトクリーム美味

療院の茶室は季節の花などを生けて癒しの空気で迎える

穏やかな陽射しを浴びる散策は野草群れ咲き鳥歌う路

一輪の花に向き合うひと時は人の優しさ取り戻す時

せせらぎの木陰に歌声聞こえる小鳥も歌う音楽療法

土に触れ花に親しむ園芸療法はこころと身体を暖かくする

ボランティア集いて創りしユートピア「健康」テーマの芸術の郷

レストラン窓に広がる花園と自然食料理に舌鼓打つ

来る人を楽しませんとスタッフらが総出で汗して苑の草刈る

「花まつり」百花群れ咲くふところに人々抱かれ笑顔はじける

名物の「ともえ桜」に野点傘差してもてなす一服のお茶

種播けば双葉出揃い時来ればやがて咲かせる花作り良し

人々に花の優しさ美しさ届けんとして今日も水やる

抱かれし山ふところのMOAスクールは心を病む子ら癒す

人の愛交わる世界を描きつつモデルを作る美わしき苑

トータルに人を捉えて健康の手立てを探る奥熱海療院

目に見えぬ魂ところが洗われてなぜか清しい浄化療法

うぐいすの歌声のどけき春の山風はそよ吹きみどり満ち満ち

山林の木漏れ日注ぐ散歩道人は自然と解け合っており

阿部正路論（第九十三回）

阿部正路論

須藤 宏明

—水の底からの対峙—

阿部正路の論考での一つの特徴に、水底の思想と言うべき  
思惟がある。阿部は、釋逍空の大正十三年の作、

水底に、うつそみの面わ 沈透シネスき見ゆ。来む夜も、我の  
寂しくあらむ

という歌、及び、この歌に対する逍空の「自歌自註」での  
ちっと淵の面を見てると、水の底から見えるものとし  
て、現実現身のわが顔が、水の底から透いて見える。  
という文章に着目して、次のように述べる。

現実現身のわが顔が、水の底から透いて見えるとは、水  
の幻の中に自身の実在を見たのであって、現実も幻も同  
じ次元の上であり、生も死もひとつながりの世界にある  
と釈逍空が観念していたことを意味する。（『和歌文学発  
生史論』昭和五十二年・桜楓社・三〇九頁）

阿部が、ここで重視しているのは、私という存在が現実の自  
己と対峙するという行為、その精神性である。自己と対峙す  
るには、鏡像という手段もあるが、鏡には底はない。鏡はあ  
くまでも、平面世界であり、空間はない。逍空が見ているのは、

水面に写った自己ではなく、その奥に存在している自己であ  
り、阿部は、そこに逍空の世界の深さを指摘しているのである。  
阿部は、この水底からの自己との対峙というテーマを、逍  
空短歌にのみ見出しているのではない。阿部は、  
汲みおきの手桶の底からのぞきおる己の頬に手を当てて  
みる

この山崎方代の歌を『短歌年鑑』（昭和四十四年、角川  
版）で読んで、私は非常な恐ろしさをおぼえた。（同前・  
四六四頁）

と記している。方代と逍空の歌に共通している思念は、水の  
底に実在としての自己が存在しているという点である。水面  
に写った自己ではない。水面に写った自己は、基本的に見て  
いる自己と同一の存在である。しかし、水底に存在している  
自己は、確立した別存在である。その存在が水底から、ここ  
で水を見ている私を見ているというのである。これが、阿部  
の言う恐ろしさである。人間は、水底の自己と対峙した時、  
明確な自己意識が発生するのであろう。

深淵なる自己を模索して水底を歌う歌人も美事であるが、  
そのような歌を幾多とある近代短歌の中から抽出する阿部の  
洞察力を見なければならぬ。それは、常に「舟」という乗  
り物、メタファー・暗喩としての「舟」を、思考の核に置い  
ていたからなせる洞察であろう。「舟」に、水底に存在する  
自己を見るとき、大きな目的を見出しているのである。「舟」  
に乗って流動する自己と、水底から見つめる自己が対峙する  
空間、それが「舟」なのではなからうか。

# 歌誌散見 第六十九回

豊泉 豪

## 「かきろひ」②

「かきろひ」の〇九年三月号より、短歌作品を鑑賞する。

・闇の夜や風ははげしく雪を揉む白き変転限りもあらず

石山 宗晏

初句で切ることによって、「闇」と「白」のコントラストを強調している。白い雪に埋め尽くされた闇とは、考えてみれば不思議なものである。吹雪を体験すると実感するように、雪は空から降るばかりでなく、風によって巻き上げられ、むしろ地から烈しく降る。その様子が「雪を揉む」「白き変転」と表現されている。同じ一連に「わが吐ける息の結露か幾千の煌めきとなり明けに輝く」がある。吹雪の夜の闇の深さが、そのあしたの「煌き」を荘嚴なまでに輝かすのであろう。

・軒灯の及ぶ限りに降る雪のアスピリンめくを見つつ施錠す

早坂 信子

アスピリンは「白色無臭の粉末または鱗片状結晶」(広辞苑)である。軒灯に照らされ煌く雪が、アスピリンのようであるという比喩がおもしろい。そこには視覚的要素だけではなく、薬の効能である解熱・鎮痛の作用も暗示され、雪の夜の冷たく静まり返った空気に、作者の心が同化していることを伺わせる。さらに結句「施錠す」によって、降り募る雪に深く閉ざされて

いく情景が余韻として広がっている。

・母の字が半紙の真中に正座する八十歳のヨシエさんの書

香月千代子

「作品展」と題する一連の作である。「ヨシエさん」ととつての母は、その書いた字に表されるように、家の、あるいは彼女の心の真中に正座している人であったのだろう。この書にはおそらく「ヨシエ」とだけ署名されている。より社会的な〈姓〉はすでになく、母が呼んでくれた〈名〉だけが記されているように想像される。〈老女〉などとせず、「ヨシエさん」としたことで、「書」よりもそれを書いた個人に焦点が合い、歌に深みが出てくる。それと同時に、この老女の精神の状態が暗示されているようにも思う。以前、認知症の進行した九十歳過ぎの女性に、しきりに母親を呼んでいるのを聞いたことがある。胸の深奥に響く切ない声であった。

・ふり返る年月無頼のこともなくわが身ひとつに肌寒き午后

太田朱美

人生をふり返ってみて、どんなときも無頼であったことがない自分。そんな自分を味気なく、さびしく思っていることが下の句から伝わってくる。この歌を読んで、阿部正路「甕棺に閉ざされてすむ〈生〉ならば今少し放恣に生きむと思ふ」(歌集『太陽の舟』)が浮かんだ。無頼な烈しい生き方に心惹かれる思いや、もっと放恣であっても良いのではないかと思ひ悩む気持ち、自らの生において常に誠実でありたいという真摯な願いと、表裏一体をなすものであろう。

# 五月批評（作品Ⅰ）

佐伯 朋子

・日めくりの暦戻してゆくやうに赤きセーターほどけてゆけり  
赤いセーターをほどこきながら、するすると解けていくたびに、次々と過ぎ去った日々が懐かしく甦り、静かな追憶のひとときを過ぎた作者の姿が浮かんで参ります。上の句の表現、心魅かれます。

諸 幸子

・夫の知らぬ曾孫三人に絵本読む満ちたるいまを声に告げし  
亡くなられたご主人を偲ばれての深い恩愛の情がしみじみと伝わって参ります七首の中の一首。殊に上の句は、胸に迫るものを覚えます。

山田 鶴子

・水溜り久々映る春の空流るる雲をぼんと飛び越ゆ  
春の雨が置いていった水溜りに、流れゆく春の雲を発見、思わず雲を飛び越えた作者の、心弾む春への欲びが感じられます。水溜りを飛び越えたのですが、作者は一瞬春の空を飛ばれたのです。

山名 恒子

・如月の日暮れる空をゆく鳥の影はうすれて霧雨に消ゆ  
気負うことなく淡々と、霧雨の中に鳥影が消えてゆく情景を詠まれていて、如月の夕景が美しい墨絵のように浮かんで

吉田 幸雄

参り、叙景歌として成功していると思います。

・年越すと思はざりしをわが命如月に咲く梅花と生くる  
百三歳になられる作者の、花や鳥達小さな命にもやさしい眼差しを向けられ、感謝のうちに心豊かな日々を送られます生き方が、この作品にもよく感じられて、学ばせて戴きたく思います。

渥美 崇子

・心の揺れ保ちて夕餉の菜刻む音はリズムを持たざるままに  
心優しい若い姪御さまの訃報に、深い悲しみにつつまれた作者の心情を詠まれた七首の中の一首。悲しみの心の動揺を、菜を刻む音の乱れに捉えられた秀歌と思います。

井上 萬里子

・雪山に春雷ひとつ遠ひびく短かりわれら六十年の婚  
「春雷」という言葉のひびきが、この一首に不思議な力と輝きを与えています。傘寿を過ぎて尚、毎年ご夫妻で雪山のスキーを楽しまれ、類まれな健康と豊かな資質に恵まれたご夫妻に、更なるお幸せを祈るばかりです。

川村 貴美

・早春の光り射し入る池底の真鯉ゆらりと浮かびあざとふ  
明るさを増した早春の光りに、水底の真鯉も春の息吹に触れたく、水面に浮かび口を開閉させている様が、詩情豊かに詠まれています。「ゆらりと浮かび」という表現、見事と思えます。

木村 百合子

## 五月批評（作品Ⅱ）

多久和玲子

・反戦歌うたはず過ぎし日々ながし家をまもりて息子<sup>こ</sup>子らをまもりて

末次 房江

反戦歌については様々論議されているところですが、母として家庭人として作者のようにならざるやと詠える勇氣を持てる世の中であって欲しいと思います。

・今日ひと日優しい吾でおれさうな沈丁花ほわほわ匂ひくるあさ

月田 藤枝

自分ご自身の心の機微をあますなく出され、いつも笑顔で向き合われる作者は沈丁花に転嫁して「ほわほわ匂ふあさ」とされたこと、表現の自由さを感じます。

・何おもふ今年の夫の鬼やらひ一際声に力込もれり

照山 好子

いつも御主人を気づかわれ、お元気を喜ばれる作者に「おしあわせ」感じます。そして福寿草のあざやかな色を感じました。

・終日を声を発せぬ日もありてそれでも一日過ぎてゆくなり

富原 澄枝

独り住いは私と同じですのお気持ちはよくわかりますし、又、でも生きなければなりませんからつらく淋しいのです。残してくれたものに感謝し楽しい歌を作り続けましょう。

・手袋に潜める冬をはずしゆく芽ぐむ兆しの木に觸れたたくて

中村 陽子

軽妙で素敵な歌です。上句詩があふれ下句も作者の思い入れがあり言っています。他の歌も「山に抱かれて」の題にぴったり早春の息吹きも伝えてさわやかです。

・あどけなく笑みし嬰兒足裏の表情までも抱き入れるなり

深谷 幸子

生れて一年に満たない嬰兒のかわいらしさは一入ですが、足裏までと詠ったのは最近おばあちゃんになったばかりの作者である。抱き入れるとは最大限の愛をそがれる様子を表現されたのでしょうか。

・大賀蓮巨大な葉と花咲き満ちて朝日を背にし荷葉酒を飲む

丸山孝一郎

スケールの大きい歌であり、古代蓮に興味がひかれました。巨大な葉と花に朝日が当り、それはそれは壮大な景色でしたでしょう。それに荷葉酒を飲まれたとのこと興味をそそられました。

・春三月「どうした、どうやら、そりやすごい」さらり吹き

過ぐ自転車二台

・バーゲンのまぐるのかまをひっさげてとこしぎんざのかへりもあるく

松本 啓子

二作とも同じ作者ですが、一作目は二台の自転車の人の会話でしょうか、作者が拾われたのかとも思うのですが、かけあい万歳のように面白くまとめられ、二作目も作者の気楽な面が出ていて楽しめました。又ひらがな短歌も良いかと思いました。

# 合評

## 座談会

E 合評を始めます。今回は五月号から四首を選んで行きます。最初は伊豆支部の森田勝昭会員の

ひと声でうぐいす色に染まる道散歩のこの日一挙に春へです。いかがでしょうか。

Q 散歩道で鶯が鳴いたのでしよう。その一声で風景すべてが、うぐいす色のベールに包まれたようになり、急に春となつてしまったようだ、と作者は感じられたのでしょうか。新鮮な感覚の歌です。

H 上句は上手いですね。

B 上句は素敵で上手いけれど、「この日」が問題です。「散歩のこの日」と言われてもどんな日なのかわからない。多分、鶯のひと声で冬枯れの風景が一変するのでしよう。そのイメージを読者に届けなければ。

W 散歩の状況はどうゆうふうだったか、というのを詠むといいかもしれない。例えば、小さい春を見つけた、とか猫柳の芽がふくらんできたとか。

B 下句に冬枯れの景がどうゆうふうに変ったのか、それとも自分が見た小さな緑を具体的に表現しなくては。

H 現代短歌の会のほうでは「一挙に春へ」を良しとしますよ。新しい、と歌評する人もいるの。

B そうですね。でも、「一声でうぐいす色に染まる道」と

は「一挙に春へ」の具体的なイメージでしょう。重複になりますよね。だから、下の句は「一挙に春」になった風景か、それ以前の風景を描写すべきだと私は思います。

E では、次は同じ伊豆支部の大橋俊弘会員の

駅前 の 櫛背にして妻を待つ 弥生の夜風の温み楽しむ  
をとりあげます。如何でしょうか。

Q 駅前の櫛にもたれて奥様を待って、これから何処かへ行かれるのでしょうか。弥生の風が温かく感じられ、その温かさを楽しんでおられる。心も温かなひととき。きつと、平和な夫婦の生活でしょう。幸福な心情が出ているししみじみとした歌と思いました。

B この歌のなかで「弥生」が上手く生きていますね。「妻を待つ」のも「夜風の温み」を感じるのも弥生だからで、もう一つは、「楽しい」が上手に包んでいる。夜風も楽しい、その温みも楽しい、妻を待つのも楽しい、それは弥生だからであって、二重三重に網を張っていて、なかなか上手な作りです。

H 散歩の途中かしら。「妻を待つ」の具体性がほしいですね。  
W 「駅前の櫛にもたれて」だから散歩ではないね。これで十分わかりますよ。

Q 作者は外出された奥様を待っていらっしゃるのね。

W 奥さんは東京の方へ行ったのかもしいない。

B 「妻を待つ」のを楽しんでいる、というのはいまは羨ましいね。

W このご主人（作者）は余裕があるね。

B 結句の「楽しむ」が何気ないんだけど、良いです。

E 三首目は、岐阜支部の外箴よし枝さんの

裏山の繁みの中に木苺の藪は残さむ草を取りつつ  
に移ります。如何でしょうか。

H 初句の「裏山」がいいですね。

Q 裏山の繁みの中の木苺の藪は、これからも残そうと、(今、現在草をとりつつ思った)のか、(これからも裏山の草を取ったり、他の手入れをしながら木苺を残していこう)と思ったのか、二つの読み方ができるようです。

B 草を取りながら木苺の藪を見つけたのでしょうか。

W Qさんの言おうとしていることもわかる。

B この歌の良さは「中に」の「に」です。「に」は方向と  
か目的を表わす助詞なので、作者の木苺の藪を残そうとする  
意志が強く働くから、「に」を使ったのは正解だね。

H そうね。「に」のほうが、木苺を見つけた、という感じ  
がしますね。

Q 木苺は裏山に昔からあって繁みの中で見つけ、毎年とり  
に行き、楽しみにしていращやる方でしょう。とても素朴  
な木綿の手ざわりのような歌ですね。

B 自然に生きている人の歌だね。「繁み」を大として、「藪」  
を小として詠んでいる。

H 「繁み」と「藪」を入れ替えて詠むと、字数があわなく  
なりますものね。

B そうではなくて、生活実感の中で繁みの中に藪があると

言う事なのでしょう。

W 木苺は食べると美味しい。

E 四首目で、月の船支部の宮原喜美子会員の  
一輪の花の香りか水仙は我ふり向かせ凛として立つ  
です。どなたからでも。

Q ただ一輪の水仙の香りだったのか、私を振り向かせたの  
は。と、作者はその感動を詠んでいますね。

H 何の花の香りだろうか、と振り向いたらその答えは水仙  
の立ち姿がそこにあった、ということだね。

B この歌の問題点は、上句が水仙の香りをうたい、下句で  
は水仙の姿なので、読むほうにしてみると分裂している感  
がある。香りで振り向いたのなら、下句でその感動を詠むと良  
いと思う。それはこの歌の場合、「か」は疑問の「か」だか  
ら下句につながるのではないので、上句と下句に一貫性を持ちにく  
い。「か」を詠嘆の「や」に直して、「一輪の花の香りや」と  
して、二句切れにしてみてもどうでしょうか。

W そのほうが、「凛として立つ」も生きてくるね。

H 「何々は」とすると、説明的だと教わってきたけど、ど  
うかしら。

B この歌の場合、二句切れにすれば、そう邪魔にならないね。  
Q この歌には、凛として香り高い人になりたい、という作  
者の願望もあるように思いました。

H そうね。雰囲気の良いところを詠んでいると思いましたね。

E 本日はありがとうございます。(記録・山田紀子)

選者十首 (5月号より)

選者 岩橋千代子

☆月冴えて光きららに霽すとき梅ひらくとふ寛にゆるらに

山名 恒子

八十三歳の夫永らへよ棚ざらひの冬のジャージー二本買ひ  
たり 相羽 照代

手に受くる淡雪のひら幾片が冷たきままに過去のごと消ゆ

石塚 立子

林立のビル街泳ぎゆくこころ碧きラッセンの画廊出て来て

川村 貴美

二月果て暦一枚めくる時春の息吹きはすぐそこにあり

木村百合子

☆二十九画窮屈さふな字見詰めめてゆるりとほぐしてみたくなる「鬱」

庄司 久恵

憂ひ一つなだめて冬菜摘む畑にプリズムとなる寒のうすら

氷 末次 房江

岩場にて何かが動く汐だまり水面をゆらす春の足音

杉山 直子

春されば先ず咲く花と憶うたふ梅見にゆかな風寒くとも

武田 節子

エンドウのツタンカーメン花開き日にひに臺が故国を探す

宮島マツエ

選者 武田 節子

☆月冴えて光きららに霽すとき梅ひらくとふ寛にゆるらに

山名 恒子

雪山に春雷ひとつ遠ひびく短かりわれら六十年の婚

川村 貴美

春風にわっせわっせと押し合ひつ笑顔並べてピオラ咲きを

木村恵美子

り 寝台の上に柔の音ききながら治療と言ふ名の放射線浴ぶ

塩田 秋子

☆二十九画窮屈さふな字見詰めめてゆるりとほぐしてみたくなる「鬱」

庄司 久恵

かなしびを抱く小鳩のおもひもて日々を過すや老いたる夫

月田 藤枝

も 鉢の上にブローチひとつおいたやう福寿草咲く陽に真向か

照山 好子

ひて 手袋に潜める冬をはずしゆく芽ぐむ兆しの木に觸れたくて

中村 陽子

神経が誤植されてる終末の旋律弾く白い鍵盤

原田 寛

勤務終へ預けし吾子を抱くとき嫁は母へと顔の柔らぐ

深谷 充代

選者 森本 元昭

握力の弱くなりゆく日々のなか掴みそこねしもの多くあり  
山田 紀子

なじみ無き黄斑症の記載ある右の目玉は何をか見たる  
生稲 進

駅前の櫛背にして妻を待つ弥生の夜風の温み染しむ  
大橋 俊弘

老いづきしうからを見舞ひ帰り来し町たそがれて重き花冷え  
木村百合子

「安売地」の幟り師走の風に鳴る辛き世相の音とし聞けり  
近藤 リイ

延々と受け継がれゆく永遠の命の重さ量る術なく  
杉本 和子

しょんぼりと「絶滅危惧種」のふたをさげ地球の迷子のやうな樹のあり  
玉川 愛子

新しき墓石の裏に建主と名を彫りたるに夫が逝きにし  
冨永 道子

夜のしじま友の歌集を読み終ふる共に字びし歳月深し  
深谷 幸子

一輪の花の香りか水仙は我ふり向かせ凜として立つ  
宮原喜美子

選者 上田やい子

日めくりの暦戻してゆくやうに赤きセーターほどけてゆけり  
諸 幸子

「想庵会」と名付けて集ひし学童疎開児永久に忘れじいくさの日々を  
山本 賀子

夫の知らぬ曾孫三人に絵本読む満ちたるいまを声に告げたし  
山田田鶴子

如月の日暮れる空をゆく鳥の影はうすれて霧雨に消ゆ  
吉田 幸雄

春の日をまち侘びたりてある今宵夫の手握る熱きもの燃ゆ  
河口 礼子

ぎりぎりに形を保つコンビニのおでん大根午後につれづれ  
熊谷 香織

久びさの天からの手紙牡丹雪胸に納める亡夫のことづて  
志賀 倭子

老客はまるく小さく椅子の上深きしわ見せ茶を啜りおり  
高橋 和子

たらちねの母の残せし衣々を如月の雪 溶かし持ち去れ  
二反田 實

港より花のトンネル越え行きて大島公園椿の薫る  
木村 重夫

山麓の線香工場に水車あり静かなる音コスモスゆれる

江面 伸子

巻頭二十五首「日々是好日」の嚆矢の一首。「日々是好日」は中国宗代の仏書、「碧巖録」の雲門禪師の悟りの境地の言葉。日本でも良く使われる言葉で、普通日本では「毎日が無事で良い日である事」ぐらいの意味に使われているが、禅の世界では「絶対無」それは「摩訶<sup>まか</sup>」の事。読み方も漢語であるので「にちにちこれこうにち」と読むのが正しい。ともあれ、作者は仏教の「絶対無」などではなく、毎日毎日を良き日と思い過して行く。その日々を何の銜いも無く素直に詠い上げていく。歌はそれで良い。山は筑波山、その山の麓の水車小屋、単調な音の繰り返す静けさの中にゆるるコスモスの清楚さが良い。そしてそこは又老婆達の孫自慢の寄り合う場所であり、地元物産の直売所でもあった。段々に失われて行く田舎の風物を私達は詠い残して置かなければと、鴨川に来て最近つとに思うようになった。毎日毎日の何の取り立てて言う事も無いような日常こそが真に尊いのだと実感させられる。そしてそんな名も無い私達（阿部先生は「読み人知らず」の歌が尊いとおっしゃった）の歌こそが尊いのだと私は信じている。そして二十五首は「あのあたり太陽の位置が垂れこめし雲を明るく今日から弥生」で終わる。今日

も又好日なのである。

三尊のお薬師さんに供へしの切り分け六個おし戴きぬ

村田 孝子

雨の夜に友が電車自転車を乗り継いで作者に薬師三尊のお供え餅を持って来てくれた。その心根を十分に感じ取っている作者の心が美しい。私にこんな友はいない。作者を真実うらやましいと思う。薬師三尊とは薬師如来を中尊として左脇侍日光菩薩、右脇侍月光菩薩を言う。先頃上野国立博物館に奈良薬師寺の三尊が来て話題になった。この三尊はどこかの寺か分らないが、友も作者も深く信仰しているのであろう。「供へしの」は「供へたる」の方が良い。

パソコンのストリートビューに我が家見る鳥よけ網ごみまで映る 吉岡悠紀子

ストリートビューとは、道路を走る車から特殊カメラで全方位を撮影し、それがパソコンを通して誰でもが見る事の出来るサービスを言う。このサービスは、プライバシーの問題が大きく、家中や人の顔、車のナンバーまで見える。二〇〇九年五月より車のナンバーや人の顔にボカシが入るようだが、現代社会の恐怖を感じる。作者は怒りや恐怖など何も表現していないが、下の句の画像の細かさの表現で静かな怒りを表現して秀歌となった。

## 前々号 (293号) 秀歌抜芳

諸もろの楽しみし趣味を擲擲される重いんだよなア黄昏の身に  
浅見 時子

作者は沢山の趣味を持って、活動的に明るく生きています。そんな作者も内面は極めて繊細だ。繊細だからこそ強がる事で自らの行動を軽く見せようとする。結果として大切に守り育てている趣味が擲擲の対象となる。作者はそれを自分の内面で受け止めるしか術を持たない。下句の一人言の様なつぶやきに言い知れぬ孤独感が漂う。結句の「黄昏」は色々な意味で重い。

人混みに紛れて何やら落着きぬ仙人などには到底なれぬ  
岩橋千代子

よく雑踏の中の孤独と言う事が言われる。それは日常を多くの人と交わりながら生きている者の述懐であろう。作者は夫を亡くし一人住まいの中で、三日間人との接触の無い時間を過ごした後人混みの中に身を置いた。その時の安堵感を理由も無く落着いたと表現する。人間は社会性を持った生物だどつくづく思う。だからこそ仙人になる為の修業は厳しい。下句の明るさが小気味良い。

林立のビル街泳ぎゆくこころ碧きラッセンの画廊出て来て  
川村 貴美

私もかつて銀座のとある画廊で、クリスチャン・ラッセンの版画を見た事がある。青が大好きな私もあのラッセンの青には驚かされた。海辺の風景

や海中の生物を描いて美しくも幻想的であった。作者はどこで見たかは分からないが、正しく銀座の林立するビル街は海中の岩や海藻。まるでその中を泳いでいるような気分になった。きっと作者もそうだったのだろう。

つくづくに運わるき吾と思ふまで負けてばかりの麻雀たのし  
木村恵美子

母は私が小さい時から「お前は手が小さいから金持ちにはなれない。お人好しだから賭事には向かない。」と言っていた。成人してから母の言葉が間違っていないといつも感心させられた。それでも私は麻雀が好きだった。抜芳歌の作者の気持ちの本当に良く分かる。運が悪いのではなく、腕が悪いのだがやはり運のせいにして納得。だからやめられない。楽しいのだ。これも又人間の性の一部とつくづく思う。

沖の根の椿並木に波浮港春の夕ぐれ海を染めゆく

木村 重夫

沖の根とは普通、釣り場の事を言うのだが抜芳歌の沖の根は大島町差木地にある地名。大島の南東部にある。ここから波浮港はすぐだ。野口雨情は島にも行かず、地図も見ずに「波浮の港」の詩を書いた。三原山を背負って南東部に夕日は見えない。だからこの詩は現地の風景に忠実ではない。では抜芳歌はどうか。夕焼けを見たのでは無く、

夕ぐれて段々と海が夜の色に染まって行く姿を詠んだ。作者は風景に忠実だった。

トスカーナゆ送られてきしオリーブ油今朝のサラダは  
みどり色に染む

河野 静子

トスカーナはイタリアのフィレンツェを中心とする地方、ルネッサンス文化の開花した所。作者はそこに知人が居るのであろうか。地中海はオリーブの産地。私もトルコへ行ってオリーブ油を買って来た。以来朝食のパンはオリーブ油で食べている。忘れられない世界。作者もきっとトスカーナの風景を思い出しながらみどり色に染まるサラダを食べているに違いない。心豊かな朝を生きる幸福を思う。

日の落ちし海辺の寒さ身に沁みる海まで汽笛響けり

杉山 直子

そこは江ノ島。夫や父との思い出の土地。あるいは姉の墓もあるのか。「姉・三回忌」と題する歌群であるので、夫、父、姉等に作者の肉親にまつわる数々の思い出が作者の心に去来したのである。う事は想像に難くない。そしてそこには心に沁みる悲しい思い出もあったに違いない。下旬の「海の底まで響く汽笛」とはそんな作者の心象なのではあるまいか。

派遣切り経済危機の紙面伏せ呟く花の伝へに吐息

谷河 ひさ

日本の病巣。非人間的な雇用体制。それでも経済危機を回避出来ない国家体制の脆弱さ。御高齢でありながら、社会の動きに鋭い視線を向ける作者の感性に私は深く深く尊敬の念を抱く。そして花の呟きを聞きながら心を慰めるその処し方にも又感動する。いつまでも若い心を失わずにお元気で過ごされんことを切に願っている。

枕辺の灯りを消しし暗闇に「おやすみなさい」今夜も告げる

鶴来けい子

長い一日が終わる。今作者はなかなか自分の身を自分で処する事も出来ない。私の義父も最近足、腰、膝が痛み犬の散歩がやっと。一日がとても長く感じると言う。身体が不自由になるときと起きている時間を長く感じるに違いない。だからこそ、やっと寝られる時間の安堵感は何にも勝る幸福な瞬間なのではなかるうか。結句の「今夜も告げる」の「も」の中に万感の思いが込められていて切ない。

勤務終へ預けし吾子を抱くとき嫁は母へと顔の柔らぐ

深谷 充代

人は生きる為に助け合う事が必要だ。それはまづ身内からと言う事になるのである。しかし核家族化が進んだ今それすら難かしい。まして他人は。そして今社会は崩壊の危機に瀕し、老人ホームで焼死しても引き取り手の無い人すら生じてい

## 前々号 (293号) 秀歌抜芳

る。そんな世相の中、抜芳歌は働きに出ている嫁の為に孫を預かる。働き終えて子供を迎えに来た嫁とそして孫と、作者とその三者の濃密な心の交流を嫁の表情だけで表現し得て見事だ。

バーゲンのまぐるのかまをひっさげてとごしぎんざのかへりもあるく

松本 啓子

全てを平仮名で表現してそれが妙に生き生きしている。「バーゲン」も平仮名で良かったか。特に「ひっさげて」が良い。鮪のかまは重い。それをひっさげて戸越銀座を行きも帰りも歩く。春三月、暖かくなって心が高揚して来る若々しさが伝わって来る。そして又一人居の寂しさも又伝わって来てその明るさが悲しくもある。素直な自己表出が美しい。すべて平仮名表記の短歌は会津八一の試みであった。

自由民権に命を捧げし志士たちの鎮魂の鐘丘にこだます

丸山孝一郎

町田市の薬師池公園には三橋国民氏制作の自由民権の像がある。碑文の掉尾には「この活気に満ちた時代の想像力と、情熱にあふれた青年たちの奮闘と努力をあらためて現代に呼びさまし、そして未来に伝えるために、ここに自由民権の像を建立します」とある。教育者でもある作者は、歴史に名を残さぬ若者達の情熱が現代の自由な時代を創造した事に思いを至し、それを忘れた現代青年

に忸怩たる思いを持つ。「鎮魂の鐘」の響きは作者の心の慟哭そのものであった。

エンドウのツタンカーメン花開き日にひに蔓が故国を探す

宮島 マツエ

「エンドウのツタンカーメン」とは紀元前十四世紀のツタンカーメンの墓から出土したエンドウの種子が発芽し、栽培にも成功し日本にもその種子が伝わった。今そのエンドウの花が咲き蔓が伸び、その花と蔓はまるで意志があるかの如く故国エジプトを黄金のマスクをかぶったツタンカーメン王を探していると言う。古代ロマンを秘めたエンドウの姿を幻想的にそしてやさしく包み込んでその心が生きた。

広重も度重ね来し峠道眼下に交わる国一、東名

宮原喜美子

広重の東海道五十三次には、蒲原(夜の雪)、由井(薩多嶺)、興津(興津川)など薩埵峠の絶景に魅せられて描かれた作品は多い。それ程に風景の美しい所であった。確かに東名を走ると、由井のあたりは、海と富士山がとても美しい。だが峠道から広重が感動した風景はもう無く、今は眼下に国道一号線と東名高速道路が大蛇のようにうねって交错している。作者はその事実だけを投げ出しているが、失った物への惜別感は深い。

文語で短歌を詠む人のために (七)

奥田 清

(7) 下二段活用

口語で下二段に活用する動詞「冷える」「流れる」は、文語では「冷ゆ」「流る」であり、次のように活用する。このような活用を、下二段活用という。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
冷ゆ	冷	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
流る	流	れ	れ	る	るる	るれ	れよ

「窗外は昏く冷えゆく雪の街天童川の黒く流るる」の「冷え」「流るる」は、それぞれ何形ですか。

動詞の未然形に「ず」をつけて、エ段につくものは下二段活用である。「冷えエーズ」「流れエーズ」。

下二段の動詞のうち「得」「経」のように、語幹と語尾の区別のないものがある。なお、特に注意しなければならぬのは、「植う」「飢う」「据う」の三語で、ワ行に活用する。よって、「植え」は×。「植ゑ」が正しい表記である。

(8) 上一段活用

口語で上一段に活用する動詞「見る」は、文語でも次のようにし活用して、口語の場合とほとんど同じである。このような活用を、文語でも上一段活用という。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
見る	〇	み	み	みる	みる	みれ	みよ

上一段活用の動詞は九語である。(次回に詳述する)

動詞の未然形に「ず」をつけて、イ段について、主として語幹と語尾の区別のつかないもの、「見エーズ」上一段。「錆されし夜の列車の窓に見る湖の街くらく過ぎゆく」

○注: 「居る」は上一段だが、「居り」はラ変である。  
馬の眼に父の目玉の重なるは馬に食はれてみる(居る)ためならむ(阿部正路・神居古譚)

青春の幸うすかりし姉の手を暖めてをり(居り)夢の中まで(阿部正路・神居古譚)

(9) 上二段活用

口語で上一段に活用する動詞「過ぎる」「閉じる」などは、文語では、「過ぐ」「閉づ」であり、次のように活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
過ぐ	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
閉づ	閉	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ

「鎖されし夜の列車の窓に見る湖の街くらく過ぎゆく」「閉ぢられぬ石の仏の目も濡らす若葉雨降る美濃謡坂」

右の例歌の「過ぎ」「閉ぢ」は、それぞれ何形ですか。

動詞の未然形に「ず」をつけて、イ段について、主として語幹と語尾の区別のつくもの、「過ぎエーズ」は、上二段活用である。

# 作歌の目・作歌の技法（第五十四回）

## 哲学をする短歌（六）

三木 勝

兼好は、徒然草の三十八段で次のように言っている。

「伝へ聞き、学びて知るはまことの智にあらざ」

兼好の言うとおり伝え聞き学びて知ることがまことの智でないとするならば、まことの智はどこにあるのであろうか。兼好の言うとおりであるならば、人は伝え聞き、学びて知ることによって、まことの智には辿り着けないであらう。ならば、いかにして人はまことの智に辿り着くことができるのであろうか。このことを探求するために兼好は徒然草を執筆したのであろう。歌人兼好は歌を読む過程で湧き出てくる様々な疑問や問題点を散文という手法によって探求してみようとしたのではなからうか。そして彼は徒然草の執筆の過程の中で精神的な冒険を果敢に試みた。時には精神の破綻の危機に直面しながらも、そしてこの三十八段こそが、徒然草執筆中の最大の精神的危機であった。（注1）三十八段の結論は「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふに足らず」であった。このような結論であるならば、これ以上の執筆活動は出来ないはずであるのだが、ここから兼好の精神的な冒険は、人間存在の意味を問う世界を歩み始めるのである。

三十八段に続く三十九段では、法然上人の話である。ある人が念仏を唱えているときに眠たくなるときがあるのですが

と上人に問うと法然は「目の覚めたらんほど、念仏し給へ」と応え、行においても人生においても誠実であることと同時に不必要な力みを取り除き、力を抜き、自然体であり、かつ誠実であることの要点を兼好は捉え、記述している。次の四十段は因幡の国で栗ばかり食べている娘の話である。この段は次の次である四十二段と呼応して、重要なアクセントを成している。四十二段に入る前に、四十一段で兼好は、自らの体験を語る。賀茂の競馬を見に行った時の体験である。あの法師が木の股に座って居眠りをしながら競馬を見ていると時々落ちそうになる。これを見た人々が馬鹿な奴だとあざ笑うのだが、それを聞いた兼好がポソッとつぶやく。「我等が生死の到来、ただ今にもあらん。それを忘れて物見て目を暮らす、愚かなる事はなほまさりたるものを」と。これを聞いた人々は感心し、どうぞ前へと道を開け、「ここへ入らせ給へ」と兼好を次から次へと前列へ前列へと招いてくれる。このことに対して兼好は次のように感想を述べている。「かほどの理、誰かは思ひよらざらんけれども、思ひいかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずる事なきにあらざ」。

「胸にあたりける」ことや「木石にあらねば、ものに感ずる」心こそが、まことの智を探す旅の出発点・原点ではなからうか。そして「胸にあたる」ことや「ものに感ずる」ことは、短歌を読むことの原点なのでもある。「まことの智を探す」ことと「短歌を読むことの原点」は同じなのである。換言すれば、「短歌を読むこと」は、「まことの智を探す」旅の

原点に立つことであるともいえよう。「伝へ聞き、学びて知る」のではなく、自らの日常体験や、心に感じたことを読み留めることによって、人とは何か、社会とは何か、そして自分とは何かを、学び知っていくのである。ここにまことの智があると兼好は言っているのではなからうか。

四十二段は、人の師となるほどの優れた僧が、「鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりたりなどして」苦しみのうちになくなっていくことが書きつくられている。この僧は、唐橋中将（源雅清）の子で社会的に恵まれ、人に教えるほどの見識・教養を身につけていた。

四十段、因幡の国で栗ばかり食べていた娘は、世間では、異様な者としてささやかれていたが、親の庇護のもとでつづがなく暮らしたが、一方、研鑽を積み、人に教えるほどの見識・教養を身につけた僧は、病に倒れ、不本意な亡くなり方をする。人の生は、その人の生き方にも関らず、その人の意思を超えた事実が、ときとして起こるのである。兼好は、この二つの事例をおして、「胸にあたりける」ことや「木石にあらねば、ものに感ずる」心の例を具体的に提示して、「まことの智」へ向かう一步としたのである。

人の生における「まことの智」とは何か。仏教における悟りのように、その人自らが感得して初めてその人の「まことの智」となるのである。人は作歌によって自らがそれを感得していく機会を得る。

さて、ギリシャ・イスラム・ヨーロッパの流れを汲む哲学は、自明から始り、結論に至る。序論に始まり展開があり、結論

に至る。自明から出発する結論は普遍的であり、いずれの固體にもその結論は適用される。この手法は、構造的である。この手法は、人類が発見した人類の普遍的遺産であり、財産である。今後もこの手法を人類は活用して、歴史を創っていく。西洋哲学の手法の長所は、結論を持つことであり、その結論によって、対象や世界を動かせることである。しかしその手法は、短所でもある。結論とは、世界を閉じることであり、ひとたび世界を閉じると、その埒外にあるものは、排除されていく。たとえそれが「まことの智」であろうとも。

徒然草や短歌の世界は、結論を生み出さず、結論を持たない世界である。いつまでも部分部分の連続であり、ある世界・ある作品を閉じてみてもそれはひとつの部分で閉じられただけで、絶えず次の部分へと繋がることのできる形で閉じている。一つの埒が形成されても、その埒は絶えず拡張可能である。故にいつでも「まことの智」に向かえる。結論を持つ世界と結論を持たない世界のどちらにも長所があり短所がある。どちらもある人類の知性が生み出した遺産であり、財産である。人は結論を持たない歌集を出すことによって自らの思索の航跡を辿り世界を把握しようとする。

（注1） 島内裕子『兼好』ミネルヴァ書房 二〇〇八年  
初版第2刷 一九二頁。訂正6月号 本文で（注1）が落ちていた。四三頁一行目を次の様に訂正。「つこととなつた。（注1）」。

# 歌帖余白（六十七） — 編集雜記 —

松岡三夫

かれは年をとっていた。メキシコ湾流に小舟を浮かべ、ひとりて魚をとって日をおくっていたが、一匹も釣れない日が八十四日もつづいた。はじめの四十日はひとりの少年がついていた。—ヘミングウェイ『老人と海』

このように始まる THE OLD MAN AND THE SEA を書いた小説家アーネスト・ヘミングウェイは、一八八九年七月二十一日、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市オーパークに、医師であったクレレランスと母グレイスの第二子として誕生。アーネスト・ミラー・ヘミングウェイと命名されます。裕福で典型的な中産階級の家環境でした。

行動派の作家で、スペイン内戦や第二次世界大戦にも積極的に関わり、その経験をもとに行動的な人物を主人公にした小説を書きます。『日はまた昇る』『誰がために鐘は鳴る』『武器よさらば』などはそうした経験の産物です。

一九五四年に冒頭に引いた『老人と海』がおおきく評価され、それまでの作家としての功績及び作品全体にたいしてノーベル文学賞を贈られます。晩年は躁鬱に悩まされるようになり、執筆活動も次第に滞りがちになり、一九六一年七月二日ライフル自殺を遂げます。

『老人と海』は、これまでのヘミングウェイの作品の中で

一番いいもの、と新潮文庫にこの作品を訳した福田恒存は「解説」のなかで述べています。

引用のように、メキシコ湾の老漁夫サンチャゴは、一匹も釣れない日がつづき、四十日間はいっしょにいた少年も別の船に移るが、それにもめげず、小舟に乗りたった一人で漁に出ます。やっと僅かな餌に巨大なカジキマグロがかり、四日におよぶ死闘のすえ、生け捕ります。然し帰途、獲物はサメに襲われ終にあとかたもなく食い千切られ、大きな骨だけが無惨に残ります。辿り着いた浜辺に待っていた少年は、小屋に入り眠りに落ちた老人のかたわらに座って、寝姿をじっと見守り、老人はライオンの夢を見ます。

ヘミングウェイの人物は、ことごとく闘争的である、と福田恒存は指摘します。自己の負った傷手をみずから無視して敵と闘います。ライオンを夢見るサンチャゴ。すべてが単純明快です。老人が実際におこなったこと、そしてその周囲に確かに存在した事物、それ以外はなにも描かれておらず、またそれだけはひとつ残らず描かれているような確かさを感じます。ヘミングウェイは、そういう純粹に客観的な外面描写を用いて、かれ自身の主観が認めうる理想的な人間像を描いたのです。サンチャゴが叙事詩的英雄に酷似しているゆえんだ、と恒存はいうわけです。

自然を見たままに写す、それが我等叙景歌に志すものの第一義の道であった。

—金子薫園『叙景の歌』

実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である。—齊藤茂吉「短歌に於ける写生の説」

# 歌会報告

本部歌会 5月例会(第352回)

(北川記)

日時 5月9日(土) 13時〜16時45分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 原田 寛同人

出席 31名 出詠 32首

最初に全国大会を控え事務局より参加者の状況が報告され予想以上の方々の参加が見込まれることから、盛大な大会になることに期待が集まりました。

また来年は三木部長と月の船支部が担当する予定です。

・長らふることむごき罰受けること馬放島に老いてゆく馬

「太陽の舟(馬放島附近)」

阿部先生の歌についての高崎代表の解説。馬放島は松島の塩釜湾の入口にあり、塩竈神社の神馬が老いた後に養われた島で、先生が東北大学客員教授の時の歌。役目を終えて養われるということとは、また余生とは何か、それは生きるということであり、生きることの意味を問いかける歌でもある。

今月の高得点歌は左記の通りです。

・髪截りてこころの惑ひ断ちし吾に桜青葉の風わたりくる

須澤 溪子

・望月の玲瓏として誘へり地を這う吾に天翔むかと

佐伯 朋子

・新緑の色とりどりに萌え競ふ山の麓のあるじなき家

高崎 邦彦

・わが生は残りをかぞふ日々なれどきみを恋して生きて燃え  
たし  
松岡 三天

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 5月10日(日) 13時〜16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 6名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

仕事やそれぞれの事情で休みが多かったが、熱心な推敲や鑑賞が続きました。ミニ講義は「鑑賞から実作へ」の続きで例えば中城ふみ子の物語性や大西民子の幻想の陰影など鑑賞の足がかりとし自分たちの歌作への糧としたものよと思っただことでした。歌会では明るい歌が多かった。

・前山は淡き緑と深みどり染め分けられて初夏の陽にてる

黒羽 紘子

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 5月17日(日)

場所 岩間公民館

出席 6名 出詠 10首

司会 深谷 充代

のびのびした岩間の地で、見事な詠草や表現あと一息と  
いった詠草など、それぞれ勉強になった。助詞を使わない歌  
もあったが、一寸堅い感じがしてやはり助詞は難しい。

・よろよろと引きずられゆく老犬がする目をして主人を見上ぐ 齊藤由起子

柏支部 支部長／末次 房江 (玉川記)

日時 5月15日(金) 12時〜15時

場所 アミューゼ柏

出席 11名 出詠 22首

司会 玉川 愛子

若葉のきれいな季節となり、大会も間近のためその説明の後、新しく参加の原紀美子さんも加わり歌会となり、多くの方の意見を聞きながら詠むことの大切さを勉強しました。

・開き初めぬオオムラサキの鮮らしきこの庭に育ちし子らの歳月としつき 多久和玲子

・よもぎ摘む老いたる耳に心地よき風かとすぐる童らの声 玉川 愛子

岐阜支部 支部長／奥田 清

日時 5月17日(日) 午前9時より18日(月) 午後4時

まで

場所 下呂市小坂町湯屋温泉／鈴蘭高原

参加者 9名

岐阜支部では、恒例の年一回の吟行会を実施しましたので報告します。

初日は雨だった。雨に洗われた飛驒路の新緑は歌ごころを湧かすに充分だった。湯谷温泉旅館組合の年一回の「山菜まつり」が、土地の郷土館で催され、朴葉ずしをはじめ山菜料

理の食べ放題、囲炉裏を囲んでの昼食を堪能した。

旅館に入り、雨で増水、うなりをあげる濁流と、風に動く若葉の山に驚嘆の声を挙げた。一風呂浴びた夕べは、骨酒を酌み交わし親睦を深めた。

翌日は、快晴、昨日の濁流は嘘のように、澄み、清冽な飛驒川の源流そのものに、自然の癒しのすばらしさを感じた。その源流をたどり行き、巖立の奇岩と三ツ滝を観て、鈴蘭高原へとドライブ。残雪に輝く間近の御嶽と乗鞍岳を仰ぎ、遠く穂高連峰を眺めながら、山の空気に心身を洗って帰ったのであった。

参加者吟行詠

・川音も山音もあり御岳嶽の春の夕暮れ初夏のおとづれ 二反田 實

・朝の春昼の碧にも頂を皐月の乗鞍白く染めぬ 遠藤 剛

・旅の夜を心放ちて酌み交すぐらと酔ひたる飛驒の骨酒 木村百合子

・ひたぶるに若かりしかな忘れねば飛驒の萌黄に問ふことのある 堀部 俊克

・雪解けの水重なりて波濁る真向ふ山は晩節の雨 酒向 一次

・亡き夫と湯治に来てより十三年思ひ切なく湯舟にひたりぬ 山口クニエ

・眠りからさめたる山はさ緑に私の青春よとゆらゆらと笑む

北川としゑ  
・ 溪谷を風立ちのぼり新緑の柔樹<sup>やは</sup>々波うつ山動くなり  
奥田 清

品川支部 支部長／久保田昭江  
(松本記)

日時 5月21日(木)

場所 旗の台シルバーセンター

出席 5名 出詠 8首

司会 松本 啓子

常連の宮井さん、須澤さんの欠席でとみに淋しくなったため  
だか歌会に、今月は湯本さんが加わり賑やかになった。

・ 旗の台は吾がふるさとよ月三度若さのひけつ先づは健脚  
湯本 いと

四十年住み慣れた地に、橋本から電車のりつき通われる熱

心さがうれしい。

・ 最上川下る船より見上げたる天然杉のつよき生きざま  
久保田昭江

川下りの船の中から見上げた杉のたくましさ。作者と共に

旅する実感が快く伝わる。

・ 幾百年時を隔てて緊張す光秀一声「敵は本能寺」  
吉田 律子

変った歌であるが、作者は小学生の時母から聞いた言葉を  
忘れられないと言う。歴史に残る一言の迫力。

大田支部 支部長／庄司 久恵  
(井上記)

日時 5月25日(月) 13時～16時30分

場所 大森山王高齢者センター

出席 8名 出詠 8首

司会 井上萬里子

東京地方は快晴で外出には最高の一日でした。今日の詠草  
はそれぞれ持ち味の生きた歌が目立ちました。上句下句の入  
れ替えや助詞を考える事で主題がとても明確になって来る事  
等、司会を進めて行くことに活発な意見が多発し、楽しく有  
意義な時間でした。

・ 臆月晴れ四十九日の法要に黄泉の国へと夫行き給ふ  
河口 礼子

千葉支部 支部長／原田 寛  
(八代記)

日時 4月18日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森五貴雄

出席 17名 出詠 19首

真夏のような日差し濃い色の花が咲きはじめました。今日  
も活発な批評、意見が交されました。高得点歌の山本さんは  
見学参加ですが入会されることを期待しています。

・ 墓と家と寄り添ふ日暮の集落は死者も生者も海を見てゐる  
山本 泰子

・ 延命の管に息子は、願い込めもすこし少し父よ生きてと  
村田 一江

位置関係がわかり易くなりました。

千葉支部 支部長／原田 寛  
(八代記)

日時 5月16日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森五貴雄

出席 15名 出詠 17首

公園内の新緑も目に染みる、爽やかな日でした。高崎先生より夏の全国大会会場下見をした概略のお話がありました。矢島雅子さんの遺稿集をいただき改めて故人を偲びました。

・ 困ひなき隔離の駅前喫煙所バラバラ目線に無言の煙

高崎 邦彦

・ 古希こきと髓までひびく言葉なりこの先の坂いかに歩まん

村田 一枝

・ アルバムに写真の増しぬ楽しきはカメラの音に慣れた娘の

笑み 鈴木 愛実

鈴木さんの歌から娘さんの成長を垣間見る思いで、なごやかに意見交換がおこなわれました。

### 掲示板

雑誌『短歌』(角川書店)に「全国歌誌展望」(黒木三千代)という欄がある。その6月号に『太陽の舟 3月号』が、編集人・松岡三夫 発行所・大田区南洗足二一三二一四 通巻二九一号として次のように紹介された。(全文)

昭和五十三年阿部正路創刊の月刊誌である。表紙裏に創立宣言が掲げられている。四百字余の文章だが、最も注目した一部分だけ抜粋する。「私たちは、伝統を重んじて伝統を超え、

個性を重んじて個性を超え、物質よりも精神世界を重んじて、人間存在の意味を問いつづけてゆきたい」。執筆者は阿部だろうか。代表である高崎邦彦氏の「巻頭言」は、民芸運動にかかわって自作に銘を入れなくなり、無位無官の陶工として生を貫いた河井寛次郎への共感が述べられていて、物質よりも精神世界、という創刊の理想に通底するものを感じた。作品「批評」や「合評座談会」「秀歌拔芳」など、また奥田清氏による「文法講座」も、会員作品の文法的な問題を指摘するだけでなく、表現としてどうかという示唆もあり、批評が充実した歌誌である。

文章は、須藤宏明氏による「阿部正路論」が第八十九回、三木勝氏の「作歌の目・作歌の技法」が第五十回など、長期連載が多い。「作歌の目・作歌の技法」は、題から実作の為のハウツーかと思っただけで、思いもかけず「哲学と短歌の関係について、考察してみよう。」とあって驚いてしまった。楽しい驚きである。「今日の学問・学術のほぼ百パーセント近くをカバー」する方法である「西洋哲学を基調とする論理的方法」と、それとは全く違う歌集や随筆の方法とについて説かれる文章は、実に興味深いものであった。少しづつ己失ひゆく夫の哀しび鳩よつえばみてゆけ

手術室に入りし夫を待つ椅子に位置定まらぬわが身委ねる

月田 藤枝  
松木 昭子

## 小泉千樫のこと

原田 寛

伊藤左千夫の教えを受け、苦境を超えて清澄な歌境に達したといわれる千葉県の生んだ歌人に小泉千樫いづみちかぎがいる。明治十九年九月安房郡吉尾村に生まれる。昭和二年八月に四十二歳で死去。

伊藤左千夫は、芸術の道、歌を作るということについても、新しい題材を採ったり、殊更に想を構えたり、語句の配列に苦心したりすることなく、日々の何でもない生活のなかで感興を起すようにすればよい、と教えた。千樫はこの教えに共鳴した。千樫の生家にある歌碑には

みんなみの嶺岡山の焼くる火のこよひも赤く見えにけるかも  
の歌が刻まれている。高崎代表が住む鴨川の自宅からこの嶺岡山を望むことができる。

また次の歌は鴨川の汐入公園に碑となって立つ。

茱萸の葉の白く光れる渚みち牛ひとつゐる海にむき立つ

千樫は小学校では秀才と呼ばれたが貧しい農家に生まれ育ったため、進学出来ず、小学校の助手の後に教員講習所に学ぶ。苦学のすえ道を拓いていった。

背戸の森椎の若葉にあさ日てり一人かなしも来し方おもへば  
千樫の来し方の苦しみと喜びは青春の憂情であり、歌は平淡から清澄へと移っていったのである。

小泉千樫の名も永く房総短歌史に残ることであろう。